# 博士学位論文審査要旨

２０１０年２月２５日

論 文 題 目：　スピノザにおける直観と表現　―共同体と文化の考察のために―
学位申請者：　森　亮子
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科　教授　　中山　善樹
　副　査：　文学研究科　准教授　清瀬　みさを
　副　査：　奈良教育大学　教授　伊豆藏　好美

要　　旨：

本論文は、ティリッヒの宗教と文化に関する考察に示唆を受けてなされた、スピノザの『エチカ』の研究である。とりわけ、その関心は、『エチカ』「第五部」で展開される、第三種の認識すなわち直観知であり、その直観知に基づく神の知的愛であり、さらには、その直観知と芸術活動における想像力との関係である。

本論文の全体は、序論「共同体と文化」、第一章「感情を原理とする共同体」、第二章「理性に基づく共同体」、第三章「神と二つの愛」、第四章「表現の諸様相」、第五章「レオーネ・エブレオ『愛の対話』スピノザへの影響」、第六章「芸術表現　フェルメールとカンディンスキー」、結論「生命の展開としての共同体」から構成される。

第一章では、スピノザの『国家論』が取り上げられ、受動的感情に基づくその国家形成の原理が、『エチカ』第四部定理 37 備考 2 を介して、『エチカ』全体の論理体系のなかで拡げられ解明される。受動的感情はスピノザの分類では第一種の認識である「表象知ないしは想像知」(imagination)に属する。

第二章では、共通概念に基礎を置く理性が、第二種の認識として取り上げられる。諸個物は、理性的に振る舞うかぎり、共通の特性の範囲内においてではあるが、お互いに対立することなく協調して、一つの固有の共同体を作ることができる。この共同体に、共通概念に基づく神の認識から生まれる「神への愛」（Amor erga Deum）が応ずる。

第三章では、さらに高次で最高の第三種の認識である直観知の解明の後、直観知による「神の知的愛」（Amor Dei intellectualis）の特質が明らかにされる。個物の本質そのものを神の属性の直接無限様態において永遠の相のもとに見る直観知から必然的に生まれる、この愛においては、個物の神への愛は、同時に神の自己愛であり、個物への神の愛である。このような神の知的愛による結合に、第三種の認識に固有な個物の共同体が対応する。

第四章では、『エチカ』において、実体（神）から属性、属性から様態の関係を表示する「表現」の意味が問題となる。この場合の表現とは、外に何かを超越的に表出することではなくて、神が自己の本質を自己自身の内に内在的に展開分節する働きにほかならないことが明らかにされる。

第五章では、スピノザの神の知的愛の概念に影響を与えたと言われるイタリアのレオーネ・エブレオの『愛の対話』の分析を基に、そのスピノザへの影響の意味が考察され、被造物に対して超越する神とは異なる、スピノザの内在的な神概念の独自性の確認に到る。

第六章の対象は、まず、直観知とは相容れないものと理解されてきた想像知(imaginatio)について、直観知のなかで自由になった想像力によってスピノザの芸術論の可能性を見出すディオダートの説の検討である。彼の説によれば、この想像力が表現するのは、持続の内にある現実の世界ではなく、永

遠の相のもとにある本質の世界である。このような芸術表現の例として、フェルメールが挙げられる。さらに、本論文は、アンリの芸術論も、スピノザの内在的表現に基づく芸術論であることを、アンリのスピノザ論なども援用して、主張する。

本論文の意義は、我が国のスピノザ研究では余り例を見ないことであるが、イタリア語の文献を用いる手法によって、神の知的愛や想像について、新しい知見と見方を提示したことにある。また、三種の認識のそれぞれに固有の、個物の共存関係が対応することを、『エチカ』の定義、公理、定理などからなる幾何学的叙述をたどって、明らかにしたことである。

よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位論文としての価値を有するものと判断される。

# 総合試験結果の要旨

２０１０年2月25日

論 文 題 目：　スピノザにおける直観と表現　―共同体と文化の考察のために―
学位申請者:　森　亮子
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科　教授　　中山　善樹
　副　査：　文学研究科　准教授　清瀬　みさを
　副　査：　奈良教育大学教授　　伊豆藏　好美

要　　旨：

森亮子に対する総合試験を2010年2月25日午後3時から約2時間実施した。
総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する質問に対して適切に答え、論文の主張を擁護した。関連する分野についても、学位申請者が必要な専門知識を有することが認められた。

また、語学試験（イタリア語、フランス語）においては学位申請者が、これらの語学に関して研究上要求される運用能力を十分に持つことが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： スピノザにおける直観と表現―共同体と文化の考察のために―
氏　　名： 森　亮子
要　　旨：

スピノザは主著『エチカ』において実体（substantia）の内的展開としての世界を描き出し、それに基づく共同体論も著わした。本論では人間が能動的に生きる共同体の可能性を、三種類の認識すなわち想像知・理性・直観知の秩序に関係付けながら考察する。

精神と身体とは、それぞれ実体の思惟属性（attributum cogitationis）の様態（modus）と延長属性（attributum extensionis）の様態として一致対応しているという、いわゆる心身平行説がスピノザの思想の特徴であるが、彼はこの観点に立って、三種の認識とそれぞれの認識に基づく共同体の可能性を示した。三種の認識とは、第一種の認識としての想像知（imaginatio）、第二種の認識としての理性（ratio）、第三種の認識としての直観知（scientia intuitiva）である。

本論第一章においては感情を原理とする共同体が論じられる。人間は感情に隷属している限り受動状態にあり、不完全で混乱した想像知によってしか認識しておらず、他の人々と常に対立し合っている。それでは人間は相互に一致して協力し合うことはできないのだろうか。存在できなくなるというより大きな害悪を避けるために、人々は自己の感情のままに他人に害悪を加えたり復讐したりすることを控えるという不都合、すなわちより小さい害悪を選ぶ。このより大きな害悪を与えて人々の一致を導き生活の安寧を保障する装置が国家なのである。それでは国家という方法以外によって人々が一致し合うことはできないのだろうか。人々が受動状態を克服する可能性は全く残されていないのか。

第二章においては理性に基づく共同体が論じられる。まず人間は受動状態にあっても、十全な観念を持つことができるということが示される。それはいかなる身体変状についての観念も神に関係付けられるからであり、神の内ではあらゆるものの観念が十全であるからである。確かに受動状態である持続の中に人間が存在している限り、突然十全な認識をもって一度に能動に移行することはできない。それでもなお、いつでもどこにでもあるので頻繁に認識される共通概念によって徐々に能動を増加させていくことはできる。この共通概念に基づく認識が理性である。

十全に認識することによって精神の力能は発揮されるのだから、精神はより大きな完全性に移行する。こうして十全な認識を持つ人は、十全な観念を持つことによって喜び、また十全な認識を持っているということによっても喜ぶ。理性による認識には十全な観念および十全な認識の原因としての神の認識が伴う。このような理性に基づく共同体の基礎となるのは神への愛（Amor erga Deum）であり、またこの神への愛が理性に基づく共同体の目的となる。

理性に従って生活することができるならば、そのとき人間は人間としての本性に従っており、すなわち能動である。人間としての本性に従っているならば、理性によって自己の利益のために求めるもの、すなわち善は、他の人々にとっての善と必然的に一致している。こうして、理性に従う人は自己の利益を求めながらも必然的に他の人々のためにもその利益を求めていることになり、更には他の人々の能動が増加すれば自己の本性との一致が増加するのだから、他の人々のためにも善を求め、かつ他の人々もまた理性に従って生きることを求めるようになる。理性によって生きる人々は自己の本性によって必然的に相互に一致し合うのだから、感情に隷属しているときに必要となる国家という枠組みを必要とはしなくなる。しかし理性によってはあくまでもあらゆる人間に共通することによってのみ一致しているのだから、そこでは個人の個別性は認識されていない。神に関しても、それが自己および自己の喜びの原因であることは認識できているの

もの、まだ対象として神を認識しているにすぎない。理性によって生きることは確かに能動であるが、これとはまた別様の能動が考えられる。

第三章では直観知による共同体が論じられる。直観知は永遠の相のもとでの個物の本質の直接的認識である。持続と永遠とは相容れないものであるはずだから、理性から直観知へ一直線に移行することはできない。しかし精神の徳は認識することなのだから、理性によって認識することができれば、更に十全な認識すなわち直観知を求めるようになる。

直観知はある属性の形相的本質の認識から個物の本質の認識に至る。ではいかにして直観知は獲得されるのか。それは自己の身体の本質を神の永遠の本質の内に見ることによって、すなわち永遠の相のもとに見ることによって可能になる。しかし永遠は何らかの演繹を経て認識されるのではない。人間精神は「精神の眼」によって自己の本質が永遠であることを知ることができ、そのときこのことを疑うことはできない。人間精神は人間身体を通してしか認識することはできないのであるが、この永遠の認識は持続のもとにある身体を通してではなく、自己の身体の永遠の本質を通してなされるのである。属性から個物の認識に至るというのならば、直観知は直接的認識であるということに反するのではないかと考えられるかもしれないが、それは永遠の相のもとにおいては属性の認識が即身体の本質の認識であるということによって解決される。

精神の最高の徳であるこのような直観知には神への愛（Amor erga Deum）とは区別された神の愛（Amor Dei）が伴う。神の愛において個物と実体との相互的に含み込まれた関係が明らかになる。すなわち人間の神に対する愛は神の自己愛であり、神の自己愛によって自己同様他の人々も愛されているのである。理性の場合と異なり、神は対象的に認識されるのではなく、自己が神によって神の内に存在することが、直観知によって知られるのである。直観知とそれに伴う神の愛によって、自己が神によって神の内に、神の様態すなわち神を表現する個物として存在すると同時に、他の人々もまた神の様態として認識され、自己の存在を神と他の人々との本来的関係の内に見ることができる。従って、直観知による共同体こそが真の意味での共同体である。

第四章においては、共同体論でも問題になった実体・属性・様態の関係が表現という語によってより詳しく論じられる。スピノザの意味での表現とは、隠されたものを何かを媒介して現われさせることでも、何かを見えないものの代替とする意味でもない。スピノザの表現とは内在であって、自分を自分の内に映すこと、変状することである。実体を無限の属性が、実体の本質として表現し、それら属性は変状したものとして様態によって表現される。直接的か間接的かの差はあるものの、表現されるものは表現するものなしには存在しえず、表現するものもまた表現されるものなしでは存在しえない。これは神の内在としての世界ということによって理解される。

第五章においては、スピノザとスピノザに影響を与えたといわれるレオーネ・エブレオとの比較を通して、スピノザの神の内在としての世界と、伝統的意味での創造された世界とその世界を超越する神の違いを明らかにする。ここで神の内在の意味がより明確にされる。それはとりわけ「神の知的愛（Amor Dei intellectualis）」の概念の検証を通して鮮明になる。「神の知的愛」はエブレオのスピノザに与えた影響として最も重視すべき概念であるが、それだけ一層スピノザの神の内在としての世界の展開において、実体の表現としての個物と実体としての神の相互的で不可分な関係が説明される。

第六章ではスピノザの表現と直観の論証をもとに、芸術表現とりわけフェルメールとカンディンスキーが論じられる。想像知と直観知の関係から、持続のもとにあって混乱した想像知ではない、直観知の中で自由にされた想像知が示される。この自由にされた想像知とは、持続のもとにある身体によるのではなく、身体の永遠の本質を通してなされる十全な認識である。このことをスピノザの身体の本質の考察をもとにして更に展開する。この認識に関して重要であるのは、永遠の相のもとで認識するときにも、感覚的認識を失ってはいないということである。フェルメールの絵画が表現するのは持続のもとにある現実の世界そのものではなく、永遠の本質の世界であ

り、彼の絵画を鑑賞することは、直観知とその中で自由にされた想像知によって永遠を感じまた経験することなのである。

フェルメールの絵画が一般に具象画と分類されるのに対し、カンディンスキーの絵画は抽象画とされ、彼自身も抽象画について論じている。抽象というのはこの現実の世界にある物のデフォルメや単純化ではない。抽象するのは現実の世界では見えなくされている「生（Vie)」なのである。フェルメールとカンディンスキーの絵画は現実を描写するのではなく、隠された永遠や「生」を表現し認識可能にする。ミシェル・アンリの芸術論を通して、スピノザとフェルメールとカンディンスキーの作品は、生命の内的展開として捉えられる。

スピノザは伝統的な宗教観に囚われずに自己の思想を構築し、神を永遠無限の実体として定義し直した。そして伝統的な創造論とは異なる神の内在の世界を論じた。神の内在としての世界観から導き出されるのは、人間が能動すなわち自由になるためには、自己の外部にある何か善なるものを自己に取り入れるのではなく、自己に本来具わっている力能が妨げられることなく発揮されるようにすればよいということである。持続のもとにあって自己の存在と本質の根拠から離れてしまっている人間に、芸術作品は本来的な自己の生命の展開を認識可能にするのである。従って重要なのは生命の内的展開としての活動と経験そのものなのである。

(3,999 字)